

巻頭によせて



校長 北村 聡

Kitamura Satoshi

疫病が全世界に広がっている中でも、人類は相変わらず政治的対立やその延長線上にある武力衝突を続けています。

「西行は出家した後みちのくの旅に出かけたが、その途中、天龍川の渡しで、船が満員になった。そこへ一人の武士が現れ、無理に船に乗ろうとして、『あの法師（西行のこと）おりよ、おりよ』と鞭を振り上げ、西行のかしらをさんざんに打った。割られた頭からおびただしく血が流れたので、お供の坊さんがひどく泣き悲しむと、西行は」泣くなど論じたといひます。お供の坊さんは、かつて身分の高い武者であった西行を思い悔しくて泣いたのです。西行は「顔にかかった血をおもむろにぬぐい」歌を唱えました。

「うつ人もうたるる我ももろともに
ただひとときの夢のたはぶれ」(注)

人の世の本質を鋭く突いた表現の一つです。

この歌に接すると、人生はそれ自体が儂い夢のようなものだとの思いが、改めて強く感じられます。

広い視野に立ってみれば、人間はこの大宇宙の一部、自然の一部に過ぎません。そもそもこの宇宙、三次元空間がなぜ存在しなければならないのか、必然性が不明で、誰も解き明かすことができていません。頭をぶたれるまでもないにせよ、ちょっとした非難に傷つくことはありません。ともすれば、人に悪口を言われたことを聞いて悔しい思いをした自分が、いつの間にか他愛のない会話の中で、人のことをとやかく批判していることに気がつきます。

人の争いは絶えません。些細なことにこだわり、相手を許すことができなかったことから、裁判にまで発展することがあります。憎い相手のことを考え、不機嫌な時間を過ごすのは、時間の無駄遣いです。その上不機嫌は公害と同じく、害毒を周囲にばらまく大きな罪悪行為でもあります。

人生は一度限りの実験だと言われます。他人のことを揶揄する時間があれば、自分の生き方に常に反省を加えながら、自分の未来のために、今日を大切に、前を向いて進んでゆくことにエネルギーを注ぎたいものです。

(注) 白洲正子著「西行」昭和63年 新潮社